

「ウルムチの潜在力」

真田 幸光

亜細亜大学アジア研究所と新疆財經大
学研究院との共同研究調査の一環で序盤のウ
ルムチのみに参加した。筆者はこのうち「金
融マン的視点」からウルムチを概観し報告す
ることとする。

ウルムチの産業概観

産業としては、小麦・水稲・綿花・果物生産、
木材加工、畜産品加工や、金・銀・鉄・石油・
石炭などの鉱業も盛んであるが、最近では重
化学工業化が急速に進展している。即ち、ウ
ルムチは単なるオアシス都市ではなく、現
在、発展している製造業としては風力発電設
備製造、鉄鋼業、食品、家具製造、自動車関
連産業機械設備製造、電子産品製造、金属な
どがある。

今後はこれらの企業を輸出加工型、新技術開
発型、ソフト開発も含めた最新技術型に育
て、更に物流などを含めた第三次産業の発展
を誘引、そしてその結果として国内有数企業
の誘致や外国企業の誘致を促進、また交易セ
ンターなどの確立も目指していきたいとして
いる。そして、こうした産業の工業化と商業
分野の融合的発展などに注力していこうとし

ていると現地訪問の中では感じられた。

また、北京をはじめとする大都市からのシ
ルクロードツアーをする漢族は多く、旅行
ばかりか、この地域で不動産を購入する漢
族の動きも拡大している点、今回の調査の
中で、各所で報告されていた。

一方、当地の人情費は意外に高く、例えば、
一つの事例としてウエイトレスの月収は一、
三〇〇〜一、五〇〇人民元程度となってい
る。また、預金金利も意外に高く三ヶ月物
で六・二五%など、銀行が資金を吸収して、
貸出などの資金運用を高金利で行なうほど
の地元プロジェクトがまだまだ残っている
ことを感じさせる水準であった。

日本企業にとってのビジネス環境

上述した通り、ウルムチには間違いなく
経済発展の勢いがあり、また、今回の出張
で見ると限りでは、砂嵐を起こすほどの風力
によって提供される風力発電と中央アジア
からもたらされる化石エネルギーを原料と
する火力発電などによって、現地の電力供
給に大きな懸念はなく、また、天山山脈か
ら齧られる水を引き、現在では、水供給に

も問題はなさそうである。また、今後は高速
鉄道建設の予定もあり、交通インフラの早期
整備も期待されるなど、基礎インフラに関し
ては、大きな危惧は無いように感じられた。
人件費はやや高いと思われるものの、ビジネ
スコスト全般では、他国、他中国地域と比較
すれば、さほど高くはなく、また現地金融も
信用・担保の問題を上手にクリアしつつ対応
可能とも思われる。弁護士や会計士、ITイ
ンフラといったソフト面に近いインフラも
投資環境が悪いと規定するほどの材料は見
当たらなかった。

従って、ウルムチと日本企業のビジネスを阻
害する致命的な要因はさほど見当たらない。
しかし、その一方で、日本企業がウルムチと
ビジネスを行う大きなメリットを探り出す
ことも簡単ではない。北京からジェット機で
約四時間、北京・東京よりも離れている内陸
都市・ウルムチと日本企業を結ぶ接点は何か
を考えていくと、その解は決して簡単ではな
いということである。

そうした中で、日本企業が投資をする際に頼
りとなるであろう輸出加工区について、そし
て、現地調査を行っていくに必要な旅行社に
関する情報を以下に報告する。

ウルムチ市経済技術開発区・輸出加工区

一九九四年に設立された開発区に
二〇〇三年には輸出加工区が加わり拡大、更
に、今年から地域の行政単位が加わって、地
方の発展の為に設立された、職住接近の大き
な行政単位となっている。

敷地面積は四八五平方キロメートル、九区に二十二万人が住み、仕事を持ち、大小併せて四、〇〇〇社の企業が区内に所在している。世界五〇〇大企業が十三社、中国本土五〇〇大企業が二〇社存在し、今後はソフトウェア開発用の区域の発展に努める計画である。また、風力発電機械製造やアルミ製造では中国本土最大の企業も所在している。食品加工分野も強い。区内には二十九の研究開発期間も存在している。

全国一六の経済開発区の中で、二一六項目からなる審査を経た経済実力度では全国三十二位に位置する経済開発区であり、西方地域では、成都、重慶、西安に次ぐ経済開発区となっている。

二〇〇六～二〇一〇年の第十一次五カ年計画期間中は区内GDPが年平均二十六・四％伸び、二〇一〇年の区内GDPは約二五〇億人民元となっている。これは二〇一五年にはGDP六九五億人民元に引き上げる計画を持っている。またその際の財政収入は九〇億人民元、更に区内に一つの一〇〇億人民元企業、三つの五〇億人民元企業を誕生させたいと考えている。

一方、今後は工業団地分野と都市建設を同時並行で推進、エコビジネスを推進、環境、緑地化に配慮した都市建設、更に医療、介護、住宅、各種行政サービスが充実している福祉充実型都市も目指したいとしている。

この地域に現在所在している外資系企業関連の案件は三十三プロジェクト・三十四社、その投資額は五・七億米ドルであり、

これは二〇〇六～二〇一〇年に一年平均二〇％の伸びを示している。日本の投資企業は今のところはない。日本に留学していた中国人が日本の技術を持ち込み、水稲栽培を行なっている程度が日本関連ビジネスである。今後は、ウルムチからの交通アクセスが鉄道の再拡大、空港の再整備などによって充実され、貿易分野の拡大も期待されている。現行の貿易総額は五七・二億米ドル、これを二〇一五年には六十八億米ドルにしたいとしている。

輸出入比率は、輸出Ⅱ7・輸入Ⅱ3となっており、主要な輸先はカザフスタン七〇％、その他はキルギスタンやトルクメニスタンとなっており、主要輸出品は衣料、生活用品、輸入はやはりカザフスタンなどとの間で、欧州製の各種機械製品や石油をはじめとするエネルギー資源を輸入している。

外資系企業誘致にも積極的であり、西方地域から中央アジア、そして東欧、欧州を望む橋頭堡として、この開発区・加工区は一つの大きな候補となろう。

新疆中国国際旅行社

同社は既に一九七〇年代より、中国国際旅行社総社の新疆 Representative として存在し、新疆から外に出るアウトバウンドの仕事よりも、新疆に内国人、外国人を呼び込むインバウンドの仕事を目とする旅行社であった。また当初は外国旅行社との直接コンタクトが出来ず、中国国際旅行社の代理事務のみを行なっていたが、その後は直接コンタクト

が可能となり、その後の日本とのビジネスはJTB（当時は日本交通公社）の仕事が初めてとなった。

現在は、上場はしていないものの、株式公開をされており、中国国際旅行社が最大株主ではあるものの、経営陣を中心とする幹部が約三〇％のシェアを保有する企業となっている。かつては、シルクロードツアーなどを含めて利益率の高いビジネスも多くあったが、最近では日中関係の悪化、新疆地域南部の不安定さなどを背景に、外国人ビジネスは不冴えとなっている。

今後については、「中国人の日本観光に関するアレンジ拡大」を図ると共に、「日本人観光客の誘致を、日本の空港と敦煌を直接結ぶ一〇〇～一五〇人くらいのツアーを企画し、直行チャーター便を就航させる。

更にこれに際して、日本からは伊勢海老などの海産物を、中国本土からは乾燥棗や乾燥イチジクなどのドライ・フルーツを貨物として組み込み、利益率の高いビジネスをしたいとしており、こうしたビジネスを組む日本側のパートナーを求めている。」とのコメントがあった。

上述した通り、ウルムチと日本企業を結ぶ接点は今のところ、少ないかもしれない。しかし、その潜在性には大いに注意を払いながら、ウルムチの発展を、見守りたい。

（さなだゆきみつ・愛知淑徳大学教授）